

本年3月末、わたくしは京都大学を停年退官いたしました。

昭和5年以来在職42年、文字どおり純粋に学問と大学を愛する気持を貫いて、大過なく退官できましたことは、このうえない幸せといわねばなりません。その間、周囲の教職員や学生とたえず暖かい心が通じあい、充実した大学生活を楽しく送ることができました。昨今の落ちつかない大学の状態を考えますと、よい時代の最後の教授かもしれません。

わたくしは明治41年、京都市南郊の吉祥院に生まれました。水害でしばしばいためつけられた村の人々の悲惨な姿、それが若い日のわたくしの心をとらえたのでしょうか。大学で土木工学を修め、その後今日まで、水理学、水文学、河川工学、海岸工学などの教育と研究に専念できましたことは、いわば、わたくしなりに初志を貫徹したともいえます。土砂水理学、とくに河床洗掘、開水路定常流、流出現象、水文統計と河川計画、海岸浸食と海岸堤防などについて興味をいだき、それらの研究に没頭しましたが、決して満足な成果を得たとはいいがたく、はずかしく思っております。しかし、こうした長い大学生活を通じて、体験しましたことも少なくありませんので、来し方をかえりみて、思いつくままに二、三述べさせていただきます。

何といっても第一に思い出されるのは、終戦直後、当時の工学部長のもとで土木工学教室の一番若い主任教授として善後策を講じたときの人知れぬ苦労であります。わが国の復興と発展をめざして、教官進退の内規、カリキュラムの刷新、新制大学への移行、新制大学院の発足など、教育・研究の大変革が、あいついで行なわれました。わが土木工学教室では、次々と若い教官が任命せられ、その後の理工科系教育の大拡充期に際会するとともに、防災研究所の発足とあいまって、今日のような大世帯となりました。その間、とくに努めましたことは、人材養成についてであります。

若い人々の長所をとらえ、それを強調して自信を与える、それが独創的な展開へとつながるとというのが、わたくしの一貫した考えでありました。できるだけ研究組織をととのえ、研究費や研究施設を確保して、立派な環境をつくりあげる、こうして多くの俊秀が育ってくれまし

* 正会員 工博 京都大学名誉教授(財)防災研究協会理事

たことを喜んでいきます。

年々各大学では、新しい講座や部門の計画をたてて文部省に予算を要求していますが、諸般の事情から、なかなかうまく運ばないようであります。現実には少なくとも十年余、着実に研究業績を積んで学界で高く評価されなければなりませんし、学問の進歩とともに次々と要請される境界領域を開拓して、新たな学際的な発展に寄与できるように、はじめて講座や部門の新設が期待できると思います。こうして、研究者の意欲をもりあげて着々と研究成果を積み上げ、研究機関の整備拡充をはかっていけば、おのずから人事の行きづまりを打開して、たえず清新な活気をもちつづけることができましょう。大学の自治や学問の自由とも関連し、教職員や学生の意見を十分反映して、大学みずからが自主的に改革の方向を見出し、新たな発展をつづけることが必要といわねばなりません。こうした問題に関連して、大学の学部や大学院の改革について、目的性格、組織編成、学習方式、管理運営、学生の地位、学位制度などから論ずべき点が少なくありません。慎重な検討を経て、すみやかに改革していくことが数年来の大学紛争に対処する要諦であると思いますが、これらについては改めて論ずることにします。

大学の施設や設備については、最近多くの大学で逐次整備されてきましたが、大学院のそれは、ほとんど学部のそれと共用になっています。社会・経済の発展と学術研究の進展に伴い、学部はもちろん、大学院のそれを大いに整備充実してもらわねばと思います。しかし、立派になった学部や研究所をみて、ときにわたくしの脳裏をかすめる一抹の不安があります。乏しい環境のなかにおいてこそ、広大な輝しい未来を考えて、生命が躍動するともいいます。満ちたるは欠けるの始まりともいいますが、こうした心配が杞憂に終わることを念願し、大学がいよいよ整備充実されて、科学技術のたえざる躍進の基礎となっていくことを期待してやみません。

最近日本学術会議は、科学を行政、産業、国民生活に浸透反映せしめるという本来の使命にかんがみ、特別委員会その他の機構を改め、1970年以降の科学技術をめざして、大活躍をしようとしています。長い間の会員として、わたくしの大学生活の体験を生かし、日本学術会議の使命達成に何とか役立つことができればと思っています。